

# 大学進学者の推定に関する研究

## A Study of the Estimation on Entrance into a Collage

深 田 成 子  
Seiko FUKADA

四年制大学、地元広島市およびその近郊の大学、私立大学、女子大学の全てに対して一定基準以上の進学意志を示す者の比率を分析することによって潜在的進学志望者の新たな推定を試み、短期大学よりも四年制大学を志向する傾向が高校生と保護者の双方で高まっていること、保護者の立場からすれば、私立大学であるかどうかよりも、地元の四年制大学へわが子を進学させたいという気持ちが強いことが推測された。また、設置形態を女子大学から男女共学の大学へと変更するだけで、女子高校生の志望率の増加と男子高校生の志望率を加算した結果、志望率は2.5倍以上増加すると結論付けることができたことから、開学前から、女子大としてスタートした比治山大学はいずれは男女共学の形態を目指すべきであることが、本研究の結果から強く示唆されていたことを確認した。

### 問 題

#### 1. 問題の背景

これまでに筆者は大学進学意識に関する一連の研究(深田, 1996, 1997; 深田・高野, 1995, 1996; 高野・深田, 1996)を報告してきた。これらの研究報告は、学校法人比治山学園が比治山大学設置の具体的方途を探ることを目的として実施した大学進学意識に関する研究データに基づくものであった。1991年に実施された当該調査は、広島市およびその近郊における私立四年生女子大学の設置に対する女子高校生と保護者の進学意識、および女子短大生の編入学意識を問う内容のものであった。調査実施時点からすでに12年が経過し、わが国の高等教育を取り巻く状況は急速な変化を遂げつつある。広島市およびその均衡における私立大学の状況も大きく変動しつつある。

1991年時点では、表1のように、広島県内の国立大学は1校、公立大学は2校、私立大学は10校の合計13校であった。これに対して、2003年の時点では、表2のように、国立大学は1校、公立大学は5校、私立大学は15校の合計21校となった。したがって、この12年間で広島県内の大学数は、公立大学が3校、私立大学が5校の合計8校も増加している。

1991年時点での大学進学意識に関する研究の調査データが、今日の広島市およびその近郊の私立大学の状況を予測可能であったかどうかは、大いに関心を呼ぶ問題である。しかし、今回の研究の主目的は、大学進学希望者を推定するための独自の方法を考案することによって、当該調査データから広島市およびその近郊の私立四年生女子大学に対する進学希望者の比率を推定することである。

表1. 1991年の広島県内の四年制大学一覧

	大学名	設置場所(住所)
国立(1校)	広島大学	広島市、東広島市
公立(2校)	広島県立大学	庄原市
	広島女子大学	広島市
私立(10校)	エリザベト音楽大学	広島市、東広島市
	近畿大学	呉市、東広島市
	広島経済大学	広島市
	広島工業大学	広島市
	広島修道大学	広島市
	広島女学院大学	広島市
	広島電機大学	広島市
	広島文教女子大学	広島市
福山大学	福山市	
安田女子大学	広島市	

注) 文部省高等教育局大学課(1991)より作成

表2. 2003年の広島県内の四年制大学一覧

	大学名	設置場所(住所)	変更点
国立(1校)	広島大学	東広島市、広島市(医学部・歯学部)	
公立(5校)	広島県立大学	庄原市	
	県立広島女子大学	広島市	2000年名称変更
	尾道大学	尾道市	2001年開学
	広島県立保健福祉大学	三原市	2000年開学
	広島市立大学	広島市	1994年開学
私立(15校)	エリザベト音楽大学	広島市、東広島市	
	近畿大学	東広島市	
	広島経済大学	広島市	
	広島工業大学	広島市	
	広島修道大学	広島市	
	広島女学院大学	広島市	
	広島国際学院大学	広島市	1999年名称変更
	広島文教女子大学	広島市	
	福山大学	福山市	
	安田女子大学	広島市	
	呉大学	呉市	1995年開学
	日本赤十字広島看護大学	廿日市市	2000年開学
	比治山大学	広島市	1994年開学
	広島国際大学	賀茂郡、呉市(社会環境学部)	1998年開学
福山平成大学	福山市	1994年開学	

注1) 大学教育研究会(2003)より作成

注2) 変更点は、1991年と比べてのもので、新設された大学の場合は開学年(4月より学生募集)を記している。

注3) 2000年に開学した安芸女子大学は、2002年に立志館大学と改称し、2003年に閉学となった。

## 2. 先行研究の概要

すでに筆者は一連の研究において、大学進学志望度を、①四年制大学志向、②地元大学志向(四年制大学と短期大学)、③私立大学志向(四年制大学と短期大学)、④女子大学志向(四年制大学と短期大学)の四次元から、志向次元別に分析してきた。各志向次元に関する女子高校生、保護者、および女子短大生の5段階の回答のうち、「ぜひ行きたい(女子高校生)、ぜひ行かせたい(保護者)、ぜひ行きたいと思っていた(女子短大生)」、「できれば行きたい(女子高校生)、できれば行かせたい(保護者)、できれば行きたいと思っていた(女子短大生)」、「こだわらない(女子高校生)、こだわらない(保護者)、こだわっていないかった(女子短大生)」と回答した被調査者を進学志向群とした。

女子高校生の大学進学志望度を分析した深田・高野(1995)は、進学志向を示す女子高校生が、①四年制大学志向で93.0%、②地元大学志向で79.0%、③私立大学志向で76.2%、④女子大学志向で58.4%存在する

ことを明らかにした。大学進学志向は、四年制大学志向で最も顕著であり、地元大学志向と私立大学志向も強いことが分かった。女子大学志向が最も弱い、それでも6割弱の女子高校生が志向していることが判明した。

続いて、高野・深田(1996)は、女子高校生の保護者が娘の大学進学に関して抱く意識を、志向次元別に分析した。その結果、娘の大学進学を志向する保護者は、①四年制大学志向で92.3%、②地元大学志向で97.2%、③私立大学志向で82.4%、④女子大学志向で89.4%に達し、保護者の進学志向は総じて非常に強いことが解明された。

女子高校生の標本と保護者の標本が同一高校から得られた標本でないため、深田・高野(1995)と高野・深田(1996)の結果を直接比較できないと判断した深田(1996)は、同一高校の女子高校生とその保護者に標本を限定することによって、両者の進学意識の高さを志向次元別に比較検討した。その結果、四年制大学志向と私立大学志向は女子高校生の方が保護者よりも

強いが、地元大学志向と女子大学志向は保護者の方が女子高校生よりも強いことがわかった。

さらに、女子短大生の大学編入学志望度を推測するために、深田・高野（1996）は、志向次元別に分析を試みて、以下の結果を見出した。潜在的に大学編入学志向を示す女子短大生は、①四年制大学志向で80.1%、②地元大学志向で80.7%、③私立大学志向で93.1%、④女子大学志向で73.4%となった。大学編入学志向は、私立大学志向で特に強く、四年制大学志向と地元大学志向でもかなり強く見られた。

加えて、高校生の大学進学志望度に関する性差を検討するために、深田（1997）は、同一高校に在籍する女子高校生と男子高校生の大学進学志望度を志向次元別に比較した。その結果、進学志向を示す男子高校生は、①四年制大学志向で98.5%、②地元大学志向で77.2%、③私立大学志向で58.5%であった。四年制大学志向は男子高校生の方が女子高校生よりも強いが、地元大学志向は女子高校生の方が男子高校生よりも強く、私立大学志向には性差が見られないことが判明した。

### 3. 先行研究の問題点と本研究の目的

過去の研究報告では、大学進学志望度を四年制大学志向、地元大学志向（四年制大学と短期大学）、私立大学志向（四年制大学と短期大学）、女子大学志向（四年制大学と短期大学）という四次元から次元別に捉えてきた。しかし、そうした分析方法は、地元私立四年制女子大学に対する進学志望者の割合を推定することができないという欠陥がある。地元私立四年制女子大学に対する進学志望者の割合を実際に推定するためには、四つの志向次元全てに関して志向する者を抽出する方法を工夫しなければならない。すなわち、四つの志向次元のうちどれか一次元でも志向しない者は、地元私立四年制女子大学を志向しない者であると判断できる。したがって、四つの志向次元の全次元において積極的志向を示す者を志望者、四つの志向次元のうち一次元でも積極的志向を示さない者を非志望者と判別できる方法を採用する必要がある。

四年制大学、地元大学、私立大学、女子大学の全てに対して、一定基準を上回る進学意志があると回答した者を地元私立四年制女子大学への進学希望者と分類し、四年制大学、地元大学、私立大学、女子大学のうちの少なくとも一つに対して一定基準を下回る進学意

志しないと回答した者を地元私立四年制女子大学への非進学希望者と分類する。

進学希望者の割合の推定の精度を高めるために、本研究では二種類の分類基準を使用したい。一つは、わずかであっても地元私立四年制女子大学への進学意志を持つ進学希望者の割合を判別する目的で、最低限以上の進学意志を持つ進学希望者を判別する。もう一つは、地元私立四年制女子大学への明白な進学意志を持つ者の割合を判別する目的で、明白な進学意志を持つ進学希望者を判別する。

本研究では、大学進学の当事者である女子高校生における地元私立四年制女子大学への進学志望者の割合だけでなく、保護者における地元私立四年制女子大学への娘の進学を希望する者の割合を推定する。さらに、女子短大生における地元私立四年制女子大学への潜在的編入学希望者の割合も併せて推定する。

## 方 法

### 1. 調査の概要

調査対象は、私立A高校普通科、公立B高校普通科、公立C高校普通科の女子生徒合計1912人、私立A高校の保護者1166人、私立D短大の女子学生728人であった。有効回収数（有効回収率）は、女子高校生1878票（98.2%）、保護者1002票（85.9%）、女子短大生713票（97.9%）であった。

調査は、「大学進学意識に関する調査（〇〇〇用）」というタイトルのB5判6ページの質問紙調査票とB5判1枚の回答用紙を使用して行った。（〇〇〇用）には、高校生用、保護者用、短大生用という言葉を入れた。調査は、1991年4月から5月にかけて、女子高校生の場合は学級単位に集合調査法で、保護者の場合は生徒による託送調査法で、女子短大生の場合は授業単位に集合調査法で実施した。

本報告に関係する質問項目は、四年制大学志望度（問5）、私立大学志望度（問6）、地元大学志望度（問7）、女子大学志望度（問8）の4項目である。このほかに、女子高校生と保護者の場合は本人あるいは娘の学年、女子短大生の場合は所属学科を分析に利用する。

## 2. 進学志望者の推定基準

### (1) 最低限の進学意志 (推定基準1)

推定の第1基準は、最低限の進学意志があるかどうかであり、最低限の進学意思の有無に関する回答段階の判断基準は以下のとおりである。

最低限の進学意志有りと分類する回答段階は、女子高校生の場合が「ぜひ行きたい」「できれば行きたい」「こだわらない」「あまり気はすすまないが、行ってもよい」、保護者の場合が「ぜひ行かせたい」「できれば行かせたい」「こだわらない」「あまり気はすすまないが、行かせてもよい」、女子短大生の場合が「ぜひ行きたいと思っていた」「できれば行きたいと思っていた」「こだわっていないかった」「あまり気はすすまないが、行ってもよいと思っていた」である。また、最低限の進学意志無しと分類する回答段階は、女子高校生の場合が「絶対に行きたくない」、保護者の場合が「絶対に行かせたくない」、女子短大生の場合が「絶対に行きたくないと思っていた」である。

この第1基準に基づいて、四年制大学、私立大学、地元大学、女子大学のそれぞれに対して最低限の進学意志を示す場合を1点、最低限の進学意志を示さない場合を0点とし、その組み合わせを求めると16通りとなり、得点分布は0点～4点となる。このうち4点と分類される者は、地元私立四年制女子大学に対して最低限の進学意志を持つ者、すなわち進学希望者を意味する。これに対して、0点～3点の者は、地元私立四年生女子大学に対して最低限の進学意志を持たない者、すなわち非進学希望者である。

### (2) 明白な進学意志 (推定基準2)

推定の第2基準は、明白な進学意志があるかどうかであり、明白な進学意思の有無に関する回答段階の判断基準は以下のとおりである。

明白な進学意志有りと分類する回答段階は、女子高校生の場合が「ぜひ行きたい」「できれば行きたい」「こだわらない」、保護者の場合が「ぜひ行かせたい」「できれば行かせたい」「こだわらない」、女子短大生の場合が「ぜひ行きたいと思っていた」「できれば行きたいと思っていた」「こだわっていないかった」である。また、明白な進学意志無しと分類する回答段階は、女子高校生の場合が「あまり気はすすまないが、行ってもよい」「絶対に行きたくない」、保護者の場合が「あまり気はすすまないが、行かせてもよい」「絶対に

行かせたくない」、女子短大生の場合が「あまり気はすすまないが、行ってもよいと思っていた」「絶対に行きたくないと思っていた」である。

この第2基準に基づいて、四年制大学、私立大学、地元大学、女子大学のそれぞれに対して明白な進学意志を示す場合を1点、明白な進学意志を示さない場合を0点とし、その組み合わせを求めると16通りとなり、得点分布は0点～4点となる。このうち4点と分類される者は、地元私立四年制女子大学に対して明白な進学意志を持つ者、すなわち進学希望者を意味する。これに対して、0点～3点の者は、地元私立四年生女子大学に対して明白な進学意志を持たない者、すなわち非進学希望者である。

## 結 果

### 1. 最低限の進学意志に基づく地元私立四年制女子大学への志望者の推定

#### (1) 女子高校生における志望者の推定

女子高校生の示す最低限の進学意志を基準として、地元私立四年制女子大学に対する進学志望者と非志望者の割合を、学年別と全体で表3に示した。地元私立四年制女子大学に対して、75.0%の女子高校生が進学を希望している。女子高校生の進学志望者の割合には

表3. 女子高校生における広島市内私立四年制女子大学への潜在的志望者：推定基準1

	1年生 n=618	2年生 n=633	3年生 n=627	全体 N=1878
志望者	71 (439)	74.9 (474)	78.9 (495)	75.0 (1408)
非志望者	29 (179)	25.1 (159)	21.1 (132)	25.0 (470)

注) 表内の数値は%、( )内の数値は実数

表4. 保護者における広島市内私立四年制女子大学への潜在的志望者：推定基準1

	1年生 n=355	2年生 n=353	3年生 n=294	全体 N=1002
志望者	94.9 (337)	95.2 (336)	94.2 (277)	94.8 (950)
非志望者	5.1 (18)	4.8 (17)	5.8 (17)	5.2 (52)

注) 表内の数値は%、( )内の数値は実数

学年差が見られ、学年が上昇するに伴い、進学志望者の割合が増加している ( $\chi^2=10.387, df=2, p<.01$ )。

(2) 保護者における志望者の推定

娘に関して保護者の示す最低限の進学意志を基準として、地元私立四年制女子大学に対する進学志望者と非志望者の割合を、娘の学年別と全体で表4に示した。地元私立四年制女子大学に対して、94.8%の保護者が娘の進学を希望している。保護者における進学志望者の割合には子どもの学年差はみられない ( $\chi^2=0.320, df=2, ns$ )。

(3) 女子短大生における志望者の推定

女子短大生が高校3年生のときに抱いていた最低限の進学意志を基準として、地元私立四年制女子大学に対する潜在的進学志望者と非志望者の割合を、所属学科別と全体で表5に示した。地元私立四年制女子大学に対して、80.5%の女子短大生が進学を希望していた。女子短大生の進学志望者の割合には学科差が見られ、国文科が最も高く、家政科がこれに続く ( $\chi^2=9.613, df=3, p<.05$ )。

(4) 志望者の推定比率に関する3群間比較

最低限の進学意志を推定基準に採用した場合、地元私立四年制女子大学に対して進学を志望する女子高校生、子どもの進学を志望する保護者、高校3年生時点で進学を志望していた女子短大生の比率には、3群間

で有意差が見られ、保護者、女子短大生、女子高校生の順に志望者の比率が大きい ( $\chi^2=171.980, df=2, p<.001$ )。

2. 明白な進学意志に基づく地元私立四年制女子大学への志望者の推定

(1) 女子高校生における志望者の推定

女子高校生の示す明白な進学意志を基準として、地元私立四年制女子大学に対する進学志望者と非志望者の割合を、学年別と全体で表6に示した。地元私立四年制女子大学に対して、39.2%の女子高校生が進学を希望している。女子高校生の進学志望者の割合には学年差が見られ、進学志望者は、1年生から2年生にかけて若干減少するものの、3年生では大きく増加している ( $\chi^2=8.798, df=2, p<.05$ )。

(2) 保護者における志望者の推定

娘に関して保護者の示す明白な進学意志を基準として、地元私立四年制女子大学に対する進学志望者と非志望者の割合を、娘の学年別と全体で表7に示した。地元私立四年制女子大学に対して、70.4%の保護者が娘の進学を希望している。保護者における進学志望者の割合には子どもの学年差はみられない ( $\chi^2=1.798, df=2, ns$ )。

表5. 女子短大生における広島市内私立四年制女子大学への潜在的志望者：推定基準1

	国文 n=246	幼児教育 n=120	家政 n=239	美術 n=108	全体 N=713
志望者	86.2 (212)	75.8 (91)	79.9 (191)	74.1 (80)	80.5 (574)
非志望者	13.8 (34)	24.2 (29)	20.1 (48)	25.9 (28)	19.5 (139)

注) 表内の数値は%、( )内の数値は実数

表6. 女子高校生における広島市内私立四年制女子大学への潜在的志望者：推定基準2

	1年生 n=618	2年生 n=633	3年生 n=627	全体 N=1878
志望者	39.1 (241)	35.2 (223)	43.4 (272)	39.2 (736)
非志望者	60.9 (377)	64.8 (410)	56.6 (355)	60.8 (1142)

注) 表内の数値は%、( )内の数値は実数

表7. 保護者における広島市内私立四年制女子大学への潜在的志望者：推定基準2

	1年生 n=355	2年生 n=353	3年生 n=294	全体 N=1002
志望者	70.4 (250)	72.5 (256)	67.7 (199)	70.4 (705)
非志望者	29.6 (105)	27.5 (97)	32.3 (95)	29.6 (297)

注) 表内の数値は%、( )内の数値は実数

表8. 女子短大生における広島市内私立四年制女子大学への潜在的志望者：推定基準2

	国文 n=246	幼児教育 n=120	家政 n=239	美術 n=108	全体 N=713
志望者	52.8 (130)	45.8 (55)	41.0 (98)	42.6 (46)	46.1 (329)
非志望者	47.2 (116)	54.2 (65)	59.0 (141)	57.4 (62)	53.9 (384)

注) 表内の数値は%、( )内の数値は実数

## (3) 女子短大生における志望者の推定

女子短大生が高校3年生のときに抱いていた明白な進学意志を基準として、地元私立四年制女子大学に対する潜在的進学志望者と非志望者の割合を、所属学科別と全体で表8に示した。地元私立四年制女子大学に対して、46.1%の女子短大生が進学を希望していた。女子短大生の進学志望者の割合には学科差は見られない ( $\chi^2=7.539$ ,  $df=3$ ,  $ns$ )。

## (4) 志望者の推定比率に関する3群間比較

明白な進学意志を推定基準に採用した場合、地元私立四年制女子大学に対して進学を志望する女子高校生、子どもの進学を志望する保護者、高校3年生時点で進学を志望していた女子短大生の比率には、3群間で有意差が見られ、保護者、女子短大生、女子高校生の順に志望者の比率が大きい ( $\chi^2=257.420$ ,  $df=2$ ,  $p<.001$ )。

## 考 察

## 1. 地元私立四年制女子大学への志望者

本研究の目的は、地元である広島市内およびその近郊の私立四年制女子大学に対する潜在的進学志望者を推定することであった。そのために、四年制大学、地元広島市およびその近郊の大学(四年制大学と短期大学)、私立大学(四年制大学と短期大学)、女子大学(四年制大学と短期大学)の全てに対して一定基準以上の進学意志を示す者の比率を分析することによって、潜在的進学志望者の推定を試みた。

少なくとも「あまり気はすすまないが、行ってもよい(女子高校生)」「あまり気はすすまないが、行かせてもよい(保護者)」「あまり気はすすまないが、行ってもよいと思っていた(女子短大生)」といった最低限の進学意志を推定基準とした場合、地元私立四年制女子大学に対して、進学を志望する女子高校生は75.0%に達し、子どもの進学を志望する保護者は94.5%にのぼり、高校3年生の時点で進学を志望していた女子短大生は80.5%も存在することが解明された。

さらに厳しい推定基準を設定し、少なくとも地元大学かどうか、私立大学かどうか、四年制大学かどうか、女子大学かどうか「こだわらない(女子高校生と保護者)」「こだわっていない(女子短大生)」といった明白な進学意志を推定基準とした場合、地元私立

四年制女子大学に対して、進学を志望する女子高校生は39.2%に減少するものの、子どもの進学を志望する保護者は70.4%の高率を示し、高校3年生の時点で進学を志望していた女子短大生は46.1%もいたことが明らかとなった。

地元私立四年制女子大学に対する潜在的志望者の比率は、緩やかな基準に基づく推定値と厳しい基準に基づく推定値とでは大きな違いが存在することは否定できない。特に、進学の当事者である女子高校生の地元私立四年制女子大学への進学志望者の比率は、最低限の進学意志を基準にすれば75%となるが、明白な進学意志を基準にすれば約40%と減少してしまう。しかし、それでもなお、40%の女子高校生が地元私立四年制女子大学への進学を希望していることは、広島市内における私立四年制女子大学に対する需要がかなり大きいといえる。このことは、地元私立四年制女子大学にわが子を進学させたいという保護者の比率からさらに強く確認できる。最低限の進学意志を基準にすると、約95%の保護者がわが子を地元私立四年制女子大学へ進学させる意志をもっており、明白な進学意志を基準にしたときでも、約70%の保護者がわが子の地元私立四年制女子大学への進学を望んでいることが判明した。保護者側の地元大学志向は、深刻な経済不況にあえぐわが国の現状を考えれば、ますます強くなることはあっても、弱くなることはありえない。また、短期大学よりも四年制大学を志向する傾向は、高校生と保護者の双方で高まっている。したがって、保護者の立場からすれば、私立大学であるかどうかよりも、むしろ地元の四年制大学へわが子を進学させたいという気持ちが強いのではないかと推測される。これまでに深田(1996, 1997)、深田・高野(1995, 1996)、高野・深田(1996)が報告してきた、地元私立四年制女子大学の設置に対する地域社会の要求の強さが、今回の分析を通して直接的に検証できたといえる。

## 2. 男女共学への移行

本研究では、地元私立四年生女子大学への進学志望者の推定を目的としたが、男女共学の形態をとる地元私立四年制大学であれば、女子大学に比べてどの程度進学志望者が増加するのかという問題は非常に興味深い。高野・深田(1996)によると、女子高校生の保護者は、娘の女子大学への進学に対して否定的ではない。

「ぜひ行かせたい」「できれば行かせたい」と女子大学への進学を積極的に望んでいる保護者は27.8%と少ないが、「絶対に行かせたくない」と否定的な保護者は1.8%しか存在しない。「あまり気はすすまないが、行かせてもよい」という保護者も8.8%と少ない。61.7%と大多数の保護者は、女子大学か共学かには「こだわらない」と考えている。このように、女子高校生の保護者は、女子大学か男女共学の大学かに対して、こだわりを示しておらず、むしろ女子大学への肯定的な姿勢が読み取れる。

しかし、これに対して、進学の当事者である女子高校生は、女子大学への進学に対して否定的な態度をとる者が目立つ。深田・高野（1995）によると、「ぜひ行きたい」「できれば行きたい」と積極的に女子大学への進学を望んでいる女子高校生は21.7%であり、逆に「絶対に行きたくない」と女子大学への進学に否定的な女子高校生は16.6%、「あまり気はすすまないが、行ってもよい」という消極派も25.0%みられ、「こだわらない」という女子高校生は36.7%である。本研究で使用した明白な進学意志を判断基準に採用するならば、女子大学に限定することによって、41.6%の女子高校生が進学を志望しなくなる。もし、女子大学から男女共学の大学へと設置形態を変更すれば、男女共学志向派の41.6%から女子大学志向派の21.7%を差し引いて得られる約20%が志望者増と見込める。すなわち、地元私立四年制女子大学から地元私立四年制大学へと設置形態を変更することによって、女子高校生における進学志望者は約20%増加すると予想できる。

また、深田（1997）によると、明白な進学意志を適用した場合に、男子高校生の98.5%が四年制大学を、59.5%が私立大学を、77.2%が地元大学を希望している。この数値から推定すると、約45%の男子高校生が地元私立四年制大学（当然男女共学）を志望していることがわかる。もし、地元私立四年制大学を設置すれば、男子高校生の約45%が進学を志望するといえる。

明白な進学意志を推定基準にした場合、女子高校生の地元私立四年生女子大学への進学志望者は、本研究の分析の結果から約40%であると推定された。女子大学を男女共学に変更した場合、明白な進学意志を示す女子高校生は約20%増加し、約60%に達するであろうと推測された。そのうえ、男女共学になれば、地元私立四年制大学に対して明白な進学意志を持つ約45%の

男子高校生がこれに加わることになる。設置形態を女子大学から男女共学の大学へと変更するだけで、女子高校生の志望率の増加と男子高校生の志望率を加算した結果、志望率は約40%から約105%へと、2.5倍以上増加すると結論付けることができる。18歳人口の減少に伴い入学者の確保が一段と厳しさを増すと予想されること、また、地域社会に男女共学の私立四年制大学を求める声が根強いことを考慮すれば、比治山大学は女子大学の形態を目指すのではなく、男女共学の形態を目指すべきであったといえよう。遅かれ早かれ、女子大学から男女共学への設置形態の変更が必要となることは、本研究の結果から容易に予測できる。

ちなみに、1994年4月に新設された比治山大学は、当初女子大学であったが、1998年4月に男女共学へと改組した。こうした改組の方向性は、すでに1991年に実施した本研究の調査結果から強く示唆されていたものであった。

### 3. 今後の研究課題

本報告は、女子高校生、保護者、女子短大生を調査対象とし、地元広島市内私立四年制女子大学に対する進学志望者の比率を推定した。しかし、今回の報告は、地元私立四年制女子大学への進学志望という漠然とした意識レベルでの志望者の推定にとどまっている。大学進学は、学部、学科、コースなどの要因によって大きく左右されることは明らかであり、今後は具体的な学部、学科、コース別に進学志望者の比率の推定を行う必要がある。

## 引用文献

- 大学教育研究会（監修） 2003 平成15年度全国大学一覧 財団法人文教協会
- 深田成子 1996 大学進学に関する女子高校生と保護者の意識の比較 比治山大学現代文化学部紀要, 3, 97-102.
- 深田成子 1997 高校生の大学進学意識に関する性差 比治山大学現代文化学部紀要, 4, 85-91.
- 深田成子・高野卓郎 1995 女子高校生の大学進学に関する意識 比治山大学現代文化学部紀要, 2, 127-140.
- 深田成子・高野卓郎 1996 短大生の大学進学及び編

入学に関する意識 女性文化研究センター年報  
(比治山大学), 11, 45-66.

文部省高等教育局大学課(監修) 1991 平成3年度  
全国大学一覧 財団法人文教協会

高野卓郎・深田成子 1996 女子高校生の大学進学に  
関する保護者の意識 比治山女子短期大学紀要,  
31, 1-11.

深田成子(コミュニケーション学科)

(2003.11.7 受理)